

和歌山大学学生自主創造支援部門（クリエ） クリエプロジェクト

<2025 年度ミッション成果報告書>

プロジェクト名：観光自主研究プロジェクト

ミッション名：旅する写真展

ミッションメンバー：観光学部1年 塚本航多 観光学部1年 林来春 システム工学部1年
齋藤亜衣 観光学部3年 桐田理央

キーワード：写真展・イーゼル・ものづくり・紀州材・写真立て

背景と目的

本ミッション「旅する写真展」は、A1及びA0サイズの写真を活用した展示を通じて、観光自主研究プロジェクトの活動内容の周知や、さまざまな公共空間における教育普及活動・表現活動を行うことを目的として開始された。

従来、展示のたびに写真立て（イーゼル）を借用しており、展示期間や場所の制約が多く、柔軟な活動が困難であった。そこで、自団体でイーゼルの保有することで、スピード感を持って企画や実行をし、外部組織に対しても機動力のあるPRを可能にすることを目指した。

また、ポスターや写真による表現活動を通して、学生自身の企画力・表現力・協働力の向上を図ることも重要な到達目標として設定した。

1. 活動内容

活動は「潮岬灯台での写真展」と「紀州材を用いたオリジナルイーゼルの設計・製作」の二段階で行った。

1.1 潮岬灯台での写真展

11月1日（土）・2日（日）の「灯台の日」に合わせ、和歌山県串本町の潮岬灯台にて写真展を開催した。クリエから借用したイーゼルを使用し、写真とポスターを計8枚展示した。展示内容は以下の通りである。

- ・ 潮岬灯台と潮岬地域の写真
- ・ 灯台の知識に関するポスター（「灯台守の歴史」「灯台と海路標識技術」「潮岬灯台と交通の歴史」）



図1, 2, 3 潮岬灯台での写真展の様子

展示の成果として、1日目に約100人、2日目に約170人の来場があり、燈光会との協働実績も得られた。また、本活動を契機にInstagramアカウントを開設し、現在のフォロワーは約60人に達している。会場では来場者に直接ポスター内容を説明し、「写真をお撮りしましょうか」という声かけから会話を広げることで、灯台ホテルプロジェクトへの関心や認知度向上に寄与した。「いつ完成するの?」「泊まりたい」といった声もいただき、発信することの意味を実感した。

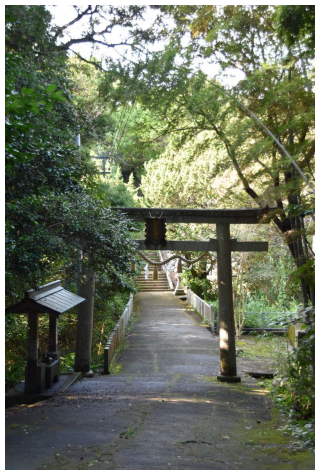


図4 潮岬灯台

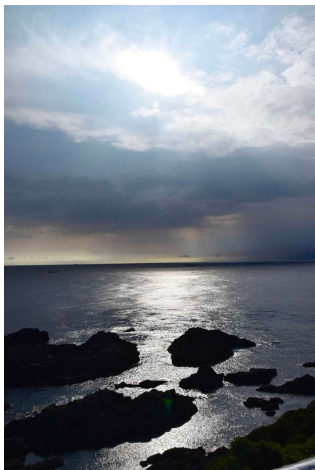


図5 灯台周辺の自然



図6 潮岬地域の風景

また、この実証展示において、オリジナルイーゼル設計に向けた仕様検討も行った。屋外での安定性、持ち運びのしやすさ、オリジナル性の三点を重点課題として確認した。

1.2 オリジナルイーゼルの設計・製作

実証展示での知見を活かし、和歌山らしさを体現するオリジナルイーゼルの設計・製作に着手した。「歴史・海・自然・紀州材の美」をテーマとした4台のイーゼルを作成した。

素材には「紀州材（杉・檜）」を採用し、湯浅町の業者に直接発注をした。木材の種類については、杉と檜の特性を考慮し、展示物の重量や耐久性に見合った選定を行った。



図7 加工前の紀州材

設計上の工夫として、分解して持ち運べる構造とし、イーゼル上部の固定部分を可動式にすることでA0・A1両サイズに対応できるようにした。各テーマのイーゼルの概要は以下の通りである。

- ・「歴史」……潮岬灯台の歴史的背景に着想を得たデザイン
- ・「海」……和歌山の豊かな海をモチーフにしたデザイン

- ・「自然」……和歌山県内全域に広がる緑と自然のデザイン
- ・「紀州材の美」……装飾を施さず、紀州材（杉）そのものの木目の美しさを活かしたデザイン



図8 「歴史」をテーマとしたイーゼル



図9 「海」をテーマとしたイーゼル



図10 「自然」をテーマとしたイーゼル



図11 「紀州材の美」をテーマとしたイーゼル

メンバーの多くが観光学部の文系学生であったため、ものづくりの設計段階における意思疎通に苦戦した。何を優先して設計すべきかという共通認識を持つことの難しさを学びながら、地元の職人・業者と協働するプロセスを経験した。

2. 活動の成果や学んだこと

展示基盤としての成果

紀州材を用いたオリジナルイーゼル4台を自作したことで、場所の制約を受けない立体的な展示が可能となり、将来的な活動における機動力を確保できた。デジタルデバイスにはない、大きく印刷された表現物が持つ「視覚的インパクト」と「無差別的な訴求力」の重要性を再認識した。

プロジェクト運営面での成果と反省

設計から製作までの過程を通して、プロジェクトの進め方を実践的に学んだ。役割分担や意思疎通、スケジュール管理の重要性を理解するとともに、外部業者とのやり取りを含めた協働の経験を得た。

最大の反省点は、プロジェクト管理の甘さである。当事者意識の欠如や意思疎通の不足により計画が大幅に遅延した。この失敗から、ガントチャート等を用いた計画の可視化や、メンバー間

でのこまめな情報共有と認識のすり合わせが不可欠であることを学んだ。この経験は、技術的な学び以上に、今後の活動において成長するための大きな糧となった。

3. 今後の展開

今年度の反省を活かし、来年度は計画的な運用体制を構築する。

- ・和歌山市民図書館での展示：製作したイーゼルの運用を開始する
- ・アドベンチャーワールドとの共同写真展：「いのちは、なぜ？」をテーマとした展示を具体化し、地域の魅力を広く発信する
- ・大規模イベントへの展開：将来的にはツーリズム EXPO 等での展示を目指し、学術的な探求と社会貢献を両立させていく

これらの取り組みを通じて、メンバー全員がプロジェクト管理能力を向上させ、継続的な展示活動を基盤として私たちの活動の発信力をさらに高める。

4. まとめ

本ミッションは、写真展示を「一度きり」で終わらせないための展示基盤づくりを目的とした取り組みであった。慣れない製作活動やプロジェクト運営において多くの壁にぶつかった一年であったが、最終的には紀州材を用いた独自の展示基盤を作り上げることができた。

この経験は、単なる物品の確保に留まらず、チームで一つのものを作り上げ、外部と協働することの難しさと喜びを教えてくれた。イーゼルの作成だけでなく、プロジェクトの進め方や協働の難しさと重要性を学んだことは、今後の活動における大きな財産である。

今後はこの経験とイーゼルを最大限に活用し、和歌山の観光魅力をより親しみやすく、ポジティブに発信していきたい。継続的な展示活動を通して、私たちの活動と和歌山の魅力を広く社会に伝えていく所存である。